

## 開戦と日本人-12月8日の記憶-

メタデータ	言語: jpn 出版者: 明治大学大学院 公開日: 2012-05-16 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 川島, 高峰 メールアドレス: 所属:
URL	<a href="http://hdl.handle.net/10291/11706">http://hdl.handle.net/10291/11706</a>

## 開戦と日本人——12月8日の記憶——

The Breakout of the Pacific War and the Japanese General Sentiments

博士前期課程 政治学専攻 1987年入学

川 島 高 峰

TAKANE KAWASHIMA

### 目 次

はじめに

第一節 事変と開戦

第二節 「臨時ニュースを申し上げます」

第三節 緊張と歓喜の朝

第四節 緊張から熱狂へ

第五節 民衆統制の方針と総翼賛の最高潮

第六節 開戦半年目 ——敗戦の予兆——

むすびにかえて

### はじめに

12月8日の記憶は、8月15日の衝撃の影に埋もれてしまい、その重要性が見落とされる傾向にある。昨年度は本誌上において『玉音放送直後の国民意識』を検討したが、開戦時の民衆意識を知ることが敗戦直後の意識を理解する手掛りになるのではないかと考えた。そこで今年度は開戦から本土初空襲のあった昭和17年4月頃迄の民心の動向について言及する。

### 第一節 事変と開戦

「開戦」と言うとは一般には太平洋戦争が連想される。しかし、旧大日本帝国は昭和6年(1931)の満洲事変以降、事実上侵略戦争に突入している。満洲事変にせよ、日華事変にせよ、政府はこれらの戦闘が宣戦布告を伴わないとの理由から「戦争」と呼ばず公式には「事変」と称することにしていた。対米英開戦に至りこれを「大東亜戦争」と呼称することとし、漸く政府は「戦争」をしていることを認めたのである。近年、歴史学では満洲事変以降、太平洋戦争の敗北にいたる期間を「十五

年戦争」と呼称することになっているが、それでも、戦前と言えば太平洋戦争が連想されるのが一般の認識である。この理由に満洲事変、日華事変当時の日本社会を知る世代が少なくなったということも挙げられよう。しかし、こうした理由もさることながら、この底流には日本人の対アジア観・対西洋観が横たわっており、それは今日においても基本的に変わってはいない。

近代日本の対アジア観はその原形を少なくとも征韓論にまで溯ることができる。日本の近隣アジア諸国に対する関係の認識は、丁度、天皇と臣民の関係に似ている。つまり、皇室が国民の宗家であるように、日本はアジア諸国の宗主国であると自覚されていた。このため近隣諸国を対等な関係にある国家とは認識することが出来なかった。「事変」という言葉の発想もこの点にある。対等な国家として認識していない相手に「宣戦布告」をする謂れはないということである。大陸への「進出」は「政治的には欧米の東洋侵略によって植民地化せられた大東亜共榮圏内の諸地方を助けて、彼等の支配より脱却せしめ、経済的には欧米の搾取を根絶して、共存共榮の圓滑なる自給自足經濟體制を確立」<sup>1)</sup>するためであると国民に宣伝されていた。このように、日本人のアジア観には常にアジアに対する侮蔑と独善的な理想が混在していた。

日清戦争以来、中国人を「チャンコロ」という蔑称で呼んでいたが、大陸での戦況ははかばかしい展開が見い出されることもなく戦線は泥沼化していた。この事変の長期化は「日支提携による東亜の自主的確立を浴せざる欧米諸國並びにコミンテルンの畫策」<sup>2)</sup>、と「飽くまで我が實力を過小に評價し、背後の勢力を恃み」<sup>3)</sup>とし大日本帝国の「善意」を理解しようとしないう一部の「不逞」支那人のためであると宣伝していた。中でも、この「背後の勢力」が事変長期化の最大の原因であると共に、「東亜」の平和を乱す元凶と見なされていた。言うまでもなく「背後の勢力」とは ABCD 包圍網の内の主にアメリカ、イギリスを指している。当時の日本人の欧米に対する認識は常に「醇化」<sup>4)</sup>の対象であると同時に、醇化の完了、すなわち超克すべき存在として認識されていた。それは日清・日露戦争以来の「列強」に対する意識でもあったが、さらには西洋文明の存在そのものが日本文化の主体性を脅かしているという危険感が非常に強かった。このため開戦の日の日本人の表情には、強敵に対する緊張と新しい挑戦への歓喜という二面が表れるのであった。

十五年戦争という枠から見れば太平洋戦争はそれ自体が戦争全体の末期に位置している。「開戦」の時点で、既に満洲事変以来10年が経過しており、慢性的な戦時体制の下に非常時の日常化が進行していた。当然、労働情勢、農村情勢には相当な疲弊が蓄積されており、日常化した戦時体制の中で、人々は12月8日の朝を迎えるのであった。

注 1) 『臣民の道』「第一章 世界新秩序の建設 二、新秩序の建設」、近代日本教育制度史資料編纂会編『近代日本教育制度史料集 第十三巻』、p. 434—435。

2) 同上、p. 432。

3) 同上。

4) 「醇化」は『国体の本義』において16回用いられ、外来の文化を摂取し、よく国体により感化し日本独自のものに完成されるといった術語で用いられている。

## 第二節 「臨時ニュースを申し上げます」

昭和16年(1941)12月8日早朝、初冬の抜けるような青空が日本列島に広がっていた。午前7時、ラジオが定時の時報を告げると、「しばらくお待ち下さい」というアナウンスが入った。その一瞬の静寂を破るかのように臨時ニュースのチャイムがけたたましく鳴り響き、館野守男アナウンサーの張り詰めた声が続いた。

「臨時ニュースを申し上げます、臨時ニュースを申し上げます、臨時ニュースを申し上げます。」

大本営陸海軍部十二月八日午前六時発表、帝国陸海軍は本八日未明西太平洋に於いてアメリカ、イギリス軍と戦闘状態に入れり。

大本営陸海軍部十二月八日午前六時発表、帝国陸海軍は本八日未明西太平洋に於いてアメリカ、イギリス軍と戦闘状態に入れり。

なお今後重要な放送があるかも知れませんが聴衆者の皆様にはどうかラジオのスイッチをお切りにならないようお願いいたします。」<sup>1)</sup>

この日は臨時ニュースが13回、定時のニュースを含めるとニュース放送回数は16回となり局の新記録となった<sup>2)</sup>。ニュースの合間には「愛国行進曲」、「軍艦マーチ」、「敵は幾万」が国民の戦意を高揚するために流された。午前10時40分、第二回目の大本営発表があり「我が軍は本八日未明戦闘状態に入るや機を失せず香港の攻撃を開始せり。」と発表された。午前11時45分には内務省情報局から「ただ今アメリカ、イギリスに対する宣戦の大詔が発せられ、また同時に臨時議会招集の詔書が公布されました。」と発表された。

正午にはラジオの時報に次いで「君が代」が流れた。詔書が読みあげられると、東条英機首相が「大詔を拝して」と題する演説を行った。この後「帝国政府声明」があり、「英米両国は東亜を永久に隷属的地位に置かんとする頑迷なる態度」のため開戦が止むに止まれぬものであったと説明された。午後一時、第六回目の大本営発表になり漸くまとまった戦況が発表されたが、真珠湾奇襲攻撃の戦果については巧妙に後送りにされていた。

一、帝国海軍は本八日未明ハワイ方面の米艦隊ならびに航空兵力に対し決死的大空襲を敢行せり。

二、帝国海軍は本八日未明上海において英砲艦「ベトレル」を撃沈せり、米砲艦「ウエーク」は同時刻に降伏せり。

三、帝国海軍は本八日未明新嘉波を爆撃し大なる戦果を収めたり。

四、帝国海軍は本八日未明「タバオ」「ウェーキ」「グアム」の敵軍事施設を爆撃せり。

午後5時には灯火管制がひかれた。この日の夕刊はどの新聞も一面に大見出しで日本の開戦を告げていた。特大の活字の見出しの下には必ず「宣戦の大詔」がこれまた紙面上段一杯に掲載され、その下段には戦況や戦果が書かれていた。「有楽町のホームで一つの新聞を読み、もう二つをオーバ

一のポケットに挟んでおきました。すっかり興奮してしまい、ポケットから二つの新聞が盗まれてしまったのも全く知りませんでした。」<sup>3)</sup>とある様に、誰もがこの一大事に新聞を競って読んだのである。

午後6時、首相官邸から情報局による放送があり、政府の発表は「政府が全責任を負い、率直に、正確に、申し上げるものでありますから、必ずこれを信頼して下さい。」とし、定時刻のニュースは聞き漏らしのないようにと国民に注意した。午後7時30分、これまた情報局長奥村喜和男により「宣戦の布告にあたり国民にうたう」と題する放送が行われた。この演説は「日本国民の言ひたかつたことをズバリと言ってくれて胸のすく思ひがし、感激を以て聴き入る。アナウンサーが『大放送』といったのは、そのときのわたくしの気持ちにピッタリ合つた言葉としてうれしかつた。」<sup>4)</sup>と記録されている。

戦意高揚のプロパガンダには歌謡も大いにその役割を振った。「宣戦布告!」、「太平洋の凱歌」、「届け、銃後のこの感謝」といった扇情的な「ニュース歌謡」がそれである。中でも取り分けその名を記憶に留めた「進め一億火の玉だ」は早くも8日午後、ニュースの間奏曲として度々放送されている。なんとも稚拙な歌詞であったが「火の玉」というフレーズが国民の気持ちにピッタリときたのであろう、後に流行語となる程であった。

#### 「進め一億火の玉だ」

- 一、行くぞ行こうぞ ぐわんとやるぞ 大和魂だてじゃない みたか知ったか底力  
こらえこらえた一億の かんにん袋のをが切れた
- 二、靖国神社の御前に 柏手うってぬかづけば 親子兄弟夫らが  
今だ頼むと声がする おいらの胸にや ぐつときた
- 三、さうだ一億火の玉だ 一人一人が決死隊 がっちりくんだこの腕で  
まもる銃後は鉄壁だ 何がなんでもやり抜くぞ

午後8時45分、この日8回目の大本営発表が行われ海軍の目覚ましい戦果が発表された。

- 一、本八日早朝帝国海軍航空部隊により決行せられたるハワイ空襲において現在までに判明せる戦果左の如し。  
戦艦二隻轟沈、戦艦四隻大破、大型巡洋艦約四隻大破、  
以上確実、他に敵飛行機多数を撃破せり、わが飛行機の損害は軽微なり。
- 二、わが潜水艦はホノルル沖において航空母艦一隻を撃沈せるものの如きもまだ確実ならず。
- 三、本八日早朝グアム島空襲において軍艦ペンギンを撃沈せり。
- 四、本日敵国商船を捕獲せるもの数隻。
- 五、本日全作戦においてわが艦艇損害なし。

午後9時になると二つの大本営発表が行われ漸くこの日の臨時ニュースは幕を閉じた。

午前7時に始まった臨時ニュースに殆どの国民が釘付けにされた。この日の放送には国民の戦意を高揚させる周到な配慮がなされていた。真珠湾攻撃の戦果が後に回され、その前に東条首相の「大

詔を拝して」や奥村情報局長の「戦線の布告にあたり国民にうったう」といった扇情的な演説を流すあたりは予め考え抜かれた演出を見るようである。

- 注 1) 12月8日、当日のラジオ放送については、櫻本富雄『戦争はラジオにのって』マルジュ社、保坂正康「ドキュメント・昭和16年12月8日 日本人が一番熱狂した日」、『潮』285号、p. 226-249の二つを主に参照とした。
- 2) 日本放送協会の記録によるものであるが、他に16回、20回というものもある。
- 3) 前掲「ドキュメント・昭和16年12月8日」、p. 243、話者は当時東京市役所勤務。
- 4) 前掲『戦争はラジオにのって』p. 197、岸田日出刀の手記より。

### 第三節 緊張と歓喜の朝

12月8日の人々の表情で最も多い受け止め方は「スッとした」といった一種の爽快感、開放感、歓喜といった強い、そして明快な肯定である。次いで、「いよいよ来るべきものが来た」という実感とその「来るべきもの」に対する緊張感である。緊張感は将来に対する不安感と背中合わせになっている面もあるが、寧ろ、やっと「進むべき道が示された」ことによる安堵感が圧倒的に多い。僅かではあるが戦争の行き先に不安を感じた者があり、そして、最も少ないのが日本の敗北を予感した者であった。

歓喜を最も素直に表現していったのは少国民の世代である。軍国主義的な教育のためでもあるが、大人と違って不安や緊張の材料に思慮が至らないためでもあろう。山中恒氏は開戦の放送を聞いて思わず「うわーい、やった、やったあ！」と叫び、当日「集団登校する子どもたちのなかから、はやくも館野アナウンサーの音色をまねて<臨時ニュース>をやってみせるものもでてきた。」<sup>1)</sup>と回想している。「通学する自転車で、友人と『国のため、天皇陛下のため』を熱っぽく語りあった。」<sup>2)</sup>とある様に、臨時ニュースは逸速く登校の際には軍国少年の話題となっていた。そして、彼らの間では「この日を境にして、父親を日中戦争で失っていた同級生が急にチャホヤされる」<sup>3)</sup>ようになり当分ヒーロー扱いを受けることとなった。

ここで青年期に開戦を迎えた人の手記を見てみよう。小長谷三郎はその日記に「来る可きものが遂に来た。何時しか来るぞと予期して居たものが遂に来た。」「これぞ我らがひそかに期待した英米への鬱憤晴らしだ。」とし、さらに「我らの気持ちは最早昨日までの安閑たる気持ちから脱けだした。落ち付く可き処に落ち付いた様な気持ちだ。其れと共に新しい押さえ難い意気に駆り立てられないでは居られないのだ。個人主義的な一切の気持ちは何処かへすっ飛んでしまった。そして愛国的な民族的な大きな気持ちに支配されてしまった。」<sup>4)</sup>と結んでいる。同年輩の山口正彦も「この日、天気晴朗なれど波高し。富士の麗峰<sup>(ママ)</sup>は一億国民の決意の前に雄々しく輝いてゐる。想へば隠忍数十年の長い歲月であつた。然し今帝国は自国の存立と名誉の為に決然として立ち上つたのだ。経済、通商不通は覚悟の事だ。英米何ぞおそるべき。俺はこの記念すべき日に高等学校受験への決意を新たにしよう。」<sup>5)</sup>と記している。二人に共通しているのは共に開戦を「鬱憤晴らし」、「天気晴朗」と

いった明快な肯定で受け止めている点と、「愛國的な民族的な大きな気持ちに支配され」、「この記念すべき日に高等学校受験への決意」といった偉大なる「国史」に自己を託したいとする青年らしい願望である。事変の長期化と非常時の日常化という閉塞状況を打破するものとして開戦は受け止められていた。これは世代を越えた共通の反応であり、まさに「もやもやしていたものが一挙に吹き飛んだ」<sup>6)</sup>のであった。

しかし、「この朝のゆきき人の面わにも 国のさだめを負ひし色みゆ」<sup>7)</sup>と詠まれた様に町の表情は緊張の面持ちで占められていた。電車の中でも「人は黙して緊張しきった空気がピンとはりつめていた」<sup>8)</sup>。この町の表情をロベール・ギランは次のように説明している。「彼らは何とか無感動を装おうとしてはいたものの、びっくり仰天した表情を隠しかねていた。この戦争は、彼らが望んだものではあったが、それでいて一方では、彼らはそんなものを欲してはいなかった。〈中略〉何だって！またしても戦争だって！このうえ、まだ戦争だって！というのは、この戦争は、三年半も続いている対中国戦争に加わり、重なる形になったからである。それにこんどの敵は、何とアメリカなのだ。アメリカといえば、六ヶ月足らず前には、大部分の新聞や指導者層が御機嫌を取り結んでいた当の相手ではないか！」<sup>9)</sup>。

緊張と歓喜の中にあつて極く少数の者ではあるがこの戦争に不安を感じ敗戦を予感した人もいた。これは少なくとも次のような範疇に入る人々である。

第一に何等かの事情から欧米の技術水準や国力を熟知していた人々である。ある二ヶ国のうちどちらの戦力が高いかという判断は、両国の産業、経済、文化、軍事に対し相当な知識がなければ困難であり、知識人といえども専門分野の相違や知識の程度に左右されていた<sup>10)</sup>。むしろ、「工場で働いていると日本でどれだけ飛行機が生産できるか、それが大体わかるんです。だから、日本がアメリカと戦争しても勝てるわけではないじゃないですかと誰もが思っていました。〈中略〉若い労働量の豊富な工員たちは、戦争に行っているの、…（中年の工員は）これからの労働力を思い、そして暗然とした」<sup>11)</sup>、また「こんなことを始めてしまつて日本は一体どうなるのか」<sup>12)</sup>とある技術者は日記に記している。この様に特殊な環境にあつた人の方が判断の材料を持っていた。中等以上の学校では、「強い衝撃を受けて茫然となり、続く言葉にはうわの空であつた。〈中略〉級友も同じように感じたらしく（私にはそう思えた）、教室は肅として声がなかった。」<sup>13)</sup>、「勝てる見込みがゼロに近いことを私たちは開戦以前に知っていた。先進国のなかで、もっとも財力のある国と、貧乏を自他ともに認める国が戦つて勝てる道理はなかった。少なくとも中学生の常識ではそうだった。」<sup>14)</sup>といった記録も見られる。しかし、こういった例は全体から見ると極めて少ない。「少なくとも中学生の常識ではそう」という点も多分に本人の思い込みではないかと思われる。同じ中学生でも先に挙げた（注の<sup>2)</sup>）例もある。そもそも上級学校への進学率自体からして当時は低い。大学においても事情は同じで「『全学生火の玉となって聖戦完遂に進もう』という教授たちのアジテーションに体をふるわせて、万歳を叫んだものもいた。講義どころではなかった。」<sup>15)</sup>といった具合で、この第一の範疇に居た人は殆どいなかったようである。

第二は、第一で示したような人が身近にいてそうした人から影響を受けていた場合である。一般の庶民層で否定的な態度を示したのはこの範疇に入る者が多い。牧師を友人に持つ進歩的な父親の下で育った柴田洋子は開戦の報に『『ドキン、やっぱり!』』と思ったが、予想に反して日本軍はどんどん勝ち進んだ。』<sup>16)</sup>とある。いずれにせよ、以上の二点はレア・ケースであった。

第三が徴兵忌避に典型されるような前線に対する恐怖である。これは敗戦の予感に直結するわけではないが、開戦を否定的な態度で迎える要因である。応召の対象になりそうな年代の者、その年齢の夫や子供を持つ婦人、既に応召された者を持つ婦人といった人々がこれに当てはまる。前線に対する恐怖は本能的に出てくるものと考えられるが、国民の圧倒的多数が開戦を明快な肯定的態度で受け入れたのは何故であろうか。

一つには戦争末期に見られたような事態を全く予想していなかったことが挙げられる。しかし、これにもまして満州事変以来、日常化した戦時体制の中で徴兵に対する諦念や覚悟が一般化し、「戦死」に対する観念が貧弱になっていたことが挙げられる。この時代、生命は「人生観」としてではなく「死生観」として語られていた。それは日本人に固有なものであるかのように強調され美化されていた。人が「死生観」を欲するのは「死」に対する恐怖から解放されたいからであり、この意味に於いて「死生観」の欲求は普遍的なものである。この時代に語られた「死生観」は戦場における「美談」であったが、戦争が慢性化し「戦死」と直面せざるを得ない状況下ではかえってこうした「美談」の内に入人は自己を埋没させていったのである。

満州事変以降、急速に流行した「戦時佳話」、「軍国美談」はこうした「死生観」の欲求に応える要件を十分に備えていた。そこでは「死」は何処までも美しいものとして、全く一瞬の内に「死んだ」としてしか描かれていない。呻き、苦しみ、切り刻まれていく様に「死んでいく」姿は皆無である。結果としての「死」だけが美化され、「死」に至る残虐で悲惨な過程は削除されていた。「軍国美談」による「死生観」は結果としての「死」だけにより構成され、これが銃後の国民の知り得る唯一の「戦死」であった。この銃後の死生観は「決死」の思想と呼ぶことが出来よう。というのは、「決死」とは死を決意することではあるが、必ず死ぬという「必死」とは異なるからである。生還の見込みがあるからこそ決意の意味が出てくる。純然たる「必死」であればそこには「生」に対する諦念しかありえない。結局、どの程度「死」を現実的に考えていたかということである。銃後の「決死」の思考は「死」が観念の世界にあるだけで、「生死一如」、「死は鴻毛よりも軽し」といったレトリックばかりが先行する中で成り立っていた。このように12月8日の人々の表情を読み取るには、既に戦争が日常化した中で新たに對米英開戦が起こったという点を忘れてはならない。

注 1) 山中恒『少国民ノート』p. 24-27、山中氏は開戦当時10才であった。

2) 『天皇そして昭和 日本人の天皇観』朝日新聞テーマ談話室編、朝日新聞社、同新聞社が1989年1月10日～2月28日までに連載した「天皇そして昭和」への投稿を集成したもの。引用はp. 110「昭和三年生まれ」今村昭典、当時13才、旧制中学一年生。

3) 前掲『潮』p. 235、発言者は当時、高等小学校二年生。



- 4) 「戦争の拡大と市民生活；小長谷三郎日記」、『横浜の空襲と戦災 2 市民生活編』、p. 40、文面より作者は18～19才と思われる。
- 5) 青木正美『戦時下の庶民日記』、この日記の著者は当時18才。
- 6) 前掲『天皇そして昭和 日本人の天皇観』p. 199、「不忠者に代わって」中村泰秀、当時23才、入営を1ヶ月後に控えていた。
- 7) 前掲『横浜の空襲と戦災 2 市民生活編』p. 60、発言者年齢不詳
- 8) 前掲『天皇そして昭和 日本人の天皇観』p. 26、「前にもこんな情景が」椿芳子、当時17才、皇居前に参拝しようとした時の回想。
- 9) ロベール・ギラン『日本人と戦争』、朝日新聞社（1979）、根本長兵衛・天野恒雄共訳
- 10) 戦後になって「あの時自分は負けると思った」等と言い出す知識人が非常に多い。こうした人の多くは自分の翼賛行為を「弾圧が厳しかったからしかたがなかった」と判で押した様にいうが、検閲を差し引いて考えたとしても、その翼賛ぶりは余りと言えど熱狂的で、積極的だったと言わざるを得ない。弾圧が苛烈であったとしても、都合の悪いときには「哀れな庶民」になり、状況が良くなると「インテリゲンチヤ」を気取るとするのは、知識人としての主体性が皆無である事の露呈に過ぎない。「知識人」であれば無抵抗は無責任という位の自覚が欲しい。
- 11) 前掲『潮』p. 239、発言者は開戦当時35才、中島飛行機の工場に勤めていた。
- 12) 前掲『天皇そして昭和 日本人の天皇観』p. 96、「時代の推移を予測して」鈴木三郎、当時26才。「外国の技術書を懸命に読んでいた」とある。
- 13) 前掲『天皇そして昭和 日本人の天皇観』p. 248、福田辰美「開戦の日に感じた不安」、開戦当時松江中学二年（12才）。文中（私にはそう思えた）としている点は割り引いて考えたほうがいい。
- 14) 『朝日ジャーナル』81年12月11日号、「『十二月八日』を掘り起こす」、高崎隆治「十二月八日と戦中世代」、開戦当時旧制中学四年（14才）。軍港近くの私立学校で「海軍学校」と呼ばれるほど海軍軍人の子弟が多く、明らかに普通より軍の実情を知れる立場にある。
- 15) 前掲『潮』p. 236。
- 16) 前掲『天皇そして昭和』p. 236、「終戦の報にほおゆるむ」、開戦当時13才。

#### 第四節 緊張から熱狂へ

12月8日早朝の緊張と歓喜は、午後8時45分発表のハワイ空襲の大戦果により人々を一気に熱狂と興奮の渦に巻き込んでいった。宮城前は朝から必勝祈願に訪れる「赤子」で「二重橋を間近に拝する濠端は早くも民草の奉拝で埋」<sup>1)</sup>っていた。これは「蒼い月光を通して遥かに拝される大内山、この世は森蔽の気ひとしおみちみちて宮城前には民草群れひきもきらず」<sup>2)</sup>に「深更」まで続いた。同夜からは灯火管制がひかれ「徹底的な灯火管制のために暗くて歩けな」<sup>3)</sup>い程であったにもかかわらずである。

この「民草」の意気は軍への献金の激増、志願兵の急増となって現れた。東京の本郷連隊司令部には従軍志願者が詰め掛け、「中には連日のように出頭して来る人もあるのでその都度説得に困る」<sup>4)</sup>、「指を切り流れる鮮血でしたための血書の嘆願書も少なくない。」<sup>5)</sup>という状況であった。海軍にも「八日以来富に」、「無敵海軍にあこがれて海軍志願兵を応募する皇国の若人たちは区役所の兵事係に続々つめかけて」<sup>6)</sup>いた。献金となると更に多くの人々がこれに参加し、「開戦第一日の八日以来銃後国民の愛国の赤誠は奔流の献金部隊となって陸軍省に殺到」<sup>7)</sup>、開戦以来3日で1600件、金額にして215万円にも達した。ハワイ空襲で戦果赫々たる海軍省にあつては「九日は午前六時半とい

うに早くも門前に十数名が押しかけ十余名の受付子に嬉しい転手古舞をさせ」<sup>8)</sup>、僅か2日で160万円に達した。献金、志願は連日のように新聞の紙面を賑わせ献金の見出しだけを挙げてみても、「銃後の赤誠 献金隊区役所に殺到」、「賞金を献金」、「門松代献金」、「永統国防献金貯金 大塚の警防団に狼火」、「匿名の老婆が銅貨で献金」、「小石川の僧侶 托鉢献金」<sup>9)</sup>ときりがない。廃品回収も各地からその高成績を伝える記事が報道され、「隣組長から組内に敵国人が住んでいて鉄の垣があるからこれを隣組で没収出来ないか」<sup>10)</sup>という問い合わせが当局にくる程であった。

国民の熱狂は民心の自発的な行為に止まるものではなく、全国の翼賛組織、自治体による「決議文」の採択、各種「決起大会」の開催へと瞬く間に発展していった。これら半官半民の運動は開戦以前から当局により計画されていたものであった。軍国議会と呼ばれた第七十八臨時国会では「大東亜戦争目的貫徹決議案」が12月17日に満場一致で採決された。しかし、これに先駆けて全国の自治体では同様の決議文が続々と採決されている。東京市小石川区では緊急区会を9日午後3時から開催し、「畏くも茲に宣戦の大詔拝し我ら小石川区民は大御心を奉載し總力を舉げて暴虐なる敵國米英を降伏せしめもつて宸襟を安じ奉らんことを期す 右決議す」とし、これを回覧板を通じ全区民に告知すると共に陸海軍省、前線司令官にも伝達した<sup>11)</sup>。この種の決議も引用していたらきりが無い。決起大会の類も同様であるが、次にその代表例を見てみる。

東京では10日午後1時から新聞社八社の共同主催で「米英撃滅国民大会」が小石川後楽園で催され、数万の観衆がこれに詰め掛けた。大会は宮城遙拝、国家斉唱、英霊への黙禱の後、奥村情報局次長の挨拶で始まった。次いで陸海軍による戦況報告、徳富蘇峰、緒方竹虎、正力松太郎、三木武吉といった言論界のそうそうたる面々による演説、宣言の決議、万歳斉唱、最後に「愛国行進曲」を斉唱して終わるというプログラムであった。この模様は全国にラジオ中継され、会場の熱気はスピーカーを通じ全国に伝播していった。閉会后、興奮さめやらぬ聴衆は近隣の神社に、そして、宮城前へ、宮城前へと参拝に繰り出し全国に「万歳」の嵐がこだました。先に引用した小長谷三郎もこの群衆の中であって、「此の日の後楽園の光景、それは熱狂した市民の姿であり、戦う日本の姿であると思った。名士の一言半句に耳を傾けわけもなく拍手かっ采するのである。自分も此の群れに居て何か力強い、興奮にじっとして居られなかった。」<sup>12)</sup>と記している。官憲の記録にも、「純忠愛國の熱情澎湃として全国に沸騰し、各地に於いて戦勝、國威宣揚祈願祭、在郷軍人、學生、生徒の街頭行進、市町村民大会等の開催せらるゝもの多く、國民は齊しく政府の剴切周到なる措置に対し絶對的支持を表明するとともに、陸海軍の<sup>(ママ)</sup>神速果敢なる作戦とその赫々たる戦果に感奮興起し、拳國一致體制益々強化せられたる感深し。」<sup>13)</sup>とある。

開戦後、戦況を逸速く知りたいがためラジオを購入する人が増え、神奈川県下だけでも開戦後、2日間で500件余りの新規加入者<sup>14)</sup>があった。これは日露戦争を契機に農村地帯で新聞購読者が増えたという事例とよく似た現象であるが、大きく異なるのはラジオが民衆統制の有効な手段として利用されるようになった点である。ラジオが地方・全国レベルでの統制手段を、回覧板が地域の統制メディアとして活用された。実際、ラジオがなければ戦争を「終わらせる」ことも出来なかったで

あろう。ラジオと並ぶ開戦後のベストセラーに『世界地図』があった。それは「飛ぶように売れて行つて、世界地図という地図は週報の付録に至るまで皆売りつくしてしまつた」<sup>15)</sup>。国民新聞などはこれを予想したか早くも9日の紙面に小さいながらも「太平洋要図(亜米大陸南洋)新聞二頁大多色刷定価五十銭国民新聞社発行」と宣伝している。「自分で書いた『南洋』の地図の上に『皇軍』の進撃の後をたどるのが日課」<sup>16)</sup>となつた位であるから、『世界地図』がよく売れたのも当然と言える。

逆に開戦により最も大きな煽を食らつたのは、映画館、遊興街であつた。横浜の映画街では開戦以来「ぱつたり客足が減」り、「ドル箱であつたアメリカ映画は以降絶対に上映しないことに業者が自治的に申し合わせた」<sup>17)</sup>。また、「遊興街の客足減の見積りは四割強で、これは増税が利いたことも争われないが、ことに待合、料亭等は全く火が消えたよう」<sup>18)</sup>であつた。もっとも、こうした傾向は個人主義的傾向の払拭ということで歓迎された。「最も顕著なことは物資不足を訴へる不平不満が市民生活から消滅し」<sup>19)</sup>、「これまで自分の利害ばかりを中心に『某店では抱き合わせでないと売つてくれない』だの『私の家では家族一同イカの夢ばかり見てゐる』といった不平不満がなくなり建設的試案が投書の形で書き綴られ始めた。」<sup>20)</sup>とし新聞もこの傾向を評価している。犯罪等も減少し警視庁管内では詐欺事件は開戦以前は一日平均3件強であつたのが、開戦後は一週間に3件という激減ぶりを示した。こうした民心動向は労働情勢にも反映し「労働争議の発生は更に著減し、また係争中のものもその早急解決に拍車を加え、其他出勤率向上、欠勤、早退、遅刻の減少、作業能率増大等の好現象となりて現はれ、就中従来職場に於いて見受けられたる階級的觀念または待遇上の不満に基く各種の不穩落書は其跡を絶ち、これに代わりて聖戦完遂の意気を高調せるものを散見せらるゝ実情」<sup>21)</sup>にあつた。

注 1) 『朝日新聞』昭和16年12月9日、「夜の神前に祈る必勝」。

2) 同上、「大内山に祈る赤子」。

3) 前掲『戦争はラジオにのつて』、芹沢光治良「十二月八日の手記」、p. 203。

4) 『朝日新聞』昭和16年12月18日、「“我も征かん” 銃後火柱 学生兵隊さん門出に『留魂文』一般の従軍願も殺到」。

5) 『国民新聞』昭和16年12月13日、「熱血沸る若人達が血書の従軍志願」。

6) 『国民新聞』昭和16年12月11日、「海兵志願者殺到 海国男子の意気」。

7) 『東京日々新聞』昭和16年12月12日、「戦果と競ふ献金 陸海軍へ赤誠の奔流」。

8) 『朝日新聞』昭和16年12月10日、「“捷報”に続く献金」。

9) 『国民新聞』、開戦から昭和16年12月14日までの「東京城北版」の記事から集めた。

10) 『国民新聞』昭和16年12月11日、「東京 城北版」小石川区での事。

11) 『国民新聞』昭和16年12月11日、「東京 城北版」。

12) 前掲、p. 40。

13) 内務省警保局、「昭和十六年十二月九日 開戦に伴ふ治安情勢」国立公文書館蔵。

14) 『朝日新聞』昭和16年12月11日、「ラジオに怒るな 電波も管制されてます」。開戦後、電波管制によりラジオの受信が悪化、「雑音の前で地団駄ふんでくやしがり、果てはセットを壊して」放送協会に修理を要請する市民が続出した。

15) 『神奈川県新聞』昭和16年12月10日、「蔽ふ緊張一色 享楽街に閑古鳥」。

16) 大島渚「私と太平洋戦争」、『文芸春秋』昭和56年12月号。

- 17) 15)に同じ。
- 18) 『東京日々新聞』昭和16年12月18日、「市民戦線はかく強し」。
- 19) 17)に同じ、新聞紙面に発表された警視庁の記録。
- 20) 19)に同じ。
- 21) 『特高月報』、昭和十六年十二月分、p. 2、「概説」。

## 第五節 民衆統制の方針と総翼賛の最高潮

開戦後、民衆統制の方針は「決戦生活訓五訓」<sup>1)</sup>として12月10日午前6時30分のラジオによる全国一斉常会の場で国民に提示された。

- 一、強くあれ、日本は国運を賭してゐる、沈着平静職場を守れ
- 二、流言に迷うな、何事も当局の指導に従って行動せよ
- 三、不要の預金引出し、買溜めは国家への反逆と知れ
- 四、防空防火は隣組の協力で死守せよ
- 五、華々しい戦果に酔うことなく、この重大決戦を最後まで頑張れ

要するに、職分奉公、防諜、貯蓄奨励、防空、長期戦の覚悟の五点である。民衆統制の組織・機構は敗戦まで朝令暮改を繰り返したが、この五点は最後まで統制の原則として繰り返し強調されていった。

職分奉公については既に見た通りであり、開戦当初の民衆の勤労意欲と戦意の高揚は昭和17年3月頃まで持続する。この間は戦前において当局の言う治安情勢が最も安定した時期であった。

開戦直後の流言の発生状況も「造言蜚語の取締に就いては嚴重注意取締中なるが、皇軍の赫々たる戦果と当局の適切なる輿論指導の為、民心は極めて明朗闊達何等も不安動揺認められざる情勢」<sup>2)</sup>であった。防諜は以前にも増しその徹底をはかることが要求され、新聞等にも防諜特集の記事が多く組まれた。「巧妙極める外人スパイの暗躍、恐るべき実例を紹介」とし家庭にある写真はスパイに狙われる可能性がある<sup>3)</sup>とか、「知らぬ間に... 壁に秘密盗聴機、敵は隣に・油断ならぬ」とし主婦から酔っ払いの話に至るまで軍に関することは片っ端からスパイに狙われている<sup>4)</sup>といったことが新聞紙上で説かれていた。防諜対策には「“軍隊の事は知らぬ”これぞ国民の合言葉に」<sup>5)</sup>といった「三猿主義」が決まって持ち出された。しかし、開戦当初はともかく「軍隊のこと」は国民が最も気になる事であり、結局防諜こそ流言の温床にほかならなかった。

預金引き出しに至っては献金に多数の人が詰め掛ける位で、物不足への不満も決戦に対する覚悟が民心の大部分を占めるようになった。しかし、物不足は不満が減ったというだけで、物が出回るようになった訳ではない。これについて12日午後7時30分のラジオ放送<sup>6)</sup>で井野農相は「国民が不自由を忍べば決して食糧不安のない」事を訴え、外米輸入がなくなっても「麦や甘藷類を雑せて辛抱さへすれば飢に苦しむことのない様な手配は既にしてある。」と説明した。「飢に苦しむ」事はないまでも長期戦となる以上それなりの覚悟が必要であると国民に覚悟促した。その他方では「元来東

亜共栄圏は立派な農業圏であり畜産権であり、水産圏であり、「米に就いてみても国外へ輸出し得る国としては、仏印、タイ等であり両国で二千二百万石の輸出余力」があるとし、東亜共栄圏の完成に向けて国民の一層の協力を駆り立てた。このような国民に覚悟を促すことによりさらなる協力を引き出すといった手法は、民衆統制の常套手段として敗戦まで繰り返されていった。戦争末期になると生活と戦況の絶望的状况は「死」の覚悟と引き換えにされていく。

防空、長期戦の覚悟も同様な民衆統制の手法であった。本土空襲や戦争の長期化について事前に国民に理解を求めるのみならず、これを戦意の高揚に転化していこうとする狙いが当局にはあった。こうした世論操作は『国内世論ノ指導要綱』<sup>7)</sup>として開戦直後には既にまとめられていた。

『国内世論ノ指導要綱』は空襲について「国土モ亦戦場トナルコトアルヘキヲ理解セシメ」、その狙いが「實際の效果ヨリモ寧ろ国民ノ精神的動揺ヲ目的トスルモノ」にあるとした。対策として「恐怖心ヲ防止スルト供ニ、沈着消火ニ挺身スルコトニヨリ、実害ヲモ最小限度ニ食ヒ止メ得ベキコト」と「空襲時ニ於ケル流言蜚語ノ流布ヲ未発ニ防止スルコト」の二つをあげている。民間防空は防諜と背中合わせであった。そして、空襲の被害発表については「国民ヲ恐怖ニ陥ルコトナク、却テ敵愾心ノ発揚ニ導ク如ク考慮スル」とした。

この空襲対策は昭和17年4月18日の本土初空襲の際には見事に効をそうした。この時は軍も虚をつかれ、「旭電化上で黒いものが落ち、ものすごい地響きを立てた。そのまま飛鳥山の方へ飛び去って行ったようである。そして後から空襲警報が鳴り出した」<sup>8)</sup>。しかし、市民の間でも「今のは本当に空襲だろうか、それとも演習だろうか」と騒ぎだした。<sup>9)</sup>位であり、緒戦の戦勝ムードの中でまさか帝都に敵機が来るとは誰も思っていなかった。この所謂ドゥーリトル空襲は中型のB25、16機による散発的な空襲であったため、爆撃を目の当たりにした者以外は「その日の夕刊を見るまではみんな半信半疑」<sup>10)</sup>であった。また、敵機を目撃した者も「この頃はまだ敵機より憲兵のほうがこわかった。」<sup>11)</sup>ために妄りに口外は出来なかった。しかし、実際に爆撃を受けた者は「歯をえぐられ、左の頬にかけてぱっくりと口があいて<中略>払っても払っても消えない血痕は、雨の降るたびに浮きあがり……」<sup>12)</sup>とその惨状を生々しく記録している。

この空襲はどう報道されたのであろうか。まず、18日午後2時の東部軍司令部発表は「現在までに判明せる敵機撃墜数は九機にして我が方の損害軽微なる模様、皇室は御安泰」<sup>13)</sup>とある。実際は一機も撃墜されていなかったが、「あッ敵機の胴体に命中弾」<sup>14)</sup>、「かくて敵機を撃墜せり」<sup>15)</sup>、といった作り話がまことしやかに報道された。これが防火活動となるとさらにエスカレートし「素手で焼夷弾を処理」<sup>16)</sup>、「病床蹴つて隣家へ手摺みで焼夷弾捨つ」<sup>17)</sup>といった「手摺み」物が何例も報道され、「濡れ蓑(ムシロ) 凄い効果」<sup>18)</sup>といったことが盛んに報道された。空襲が小規模であったために未然に消し止めたり、延焼を防いだりした実例がかなりあったことも事実ではある。しかし、この空襲による全焼家屋は百数十戸、死者約50名、負傷者約400名を数えていた。こうした被害については「軽微」で片付け鎮火の成功例ばかりが喧伝された。しかも、この初空襲の体験が防空活動の教訓とされるようになり、「平素ノ訓通り恐怖狼狽セズ、沈着機敏ニ防護活動ヲ為スニ於イテハ、被

害ヲ最小限ニ喰イ止メ得ルコト確實ナリ」<sup>19)</sup>という信念が残された。後のB29による本格的な空襲ではこの「空襲体験の教訓」が逃げ遅れによる多くの焼死者を招くのである。

『国内世論ノ指導要綱』は戦争の長期化を国民に「必定ナルコトヲ覚悟セシメ」、対策に「物資ノ節約ニ努メシムル一方、増産計画ノ確立ニ付毫ノ遺算無カラシムル如ク国民各階層ノ実践的努力ノ必要ヲ力説」する事とした。南方物資についても「進ンデ前途ニ洋々タル希望ヲ抱カシムル一方、過早浮薄ナル樂觀ヲ厳戒」し、長期戦に伴う生活の逼迫は敵国にもあり「我ノミニ非ザルコト」を国民に訴えることとした。近代戦は銃後の我慢競争という訳である。そして、ここでもまた「国民苦痛ハ之ヲ敵愾心ノ刺激ニ導キ、却テ戦意ヲ昂揚セシムル」としている。

民間において「敵愾心ノ発揚」は敵性文化の排撃という運動に現れた。この傾向は以前から根強いものであったが、開戦後はこの国粹主義に敵愾心が加わっていくのである。例えば、興亜写真報国会は「アメリカニズムの一掃」を掲げ、「いまだに残存する“アメリカ臭”風物の記録撮影」に銀座に繰り出した<sup>20)</sup>。アメリカかぶれしたポスター、横文字の看板、アメリカ映画女優ばりの洋装女といったものがカメラの放列に曝され、「銀座に見る敵性ぶりはまだ相当なもの<中略>これでも戦争してゐる銃後かと疑われる」と批判の弁を立てた。適性文化の排撃にはドイツやイタリアのクラシックは良いがアメリカやイギリスのものは駄目といった、近代の中から英米色だけを取り除くという奇妙さを伴った。開戦前、アメリカ映画がドル箱であったという事実は、殆どの日本人が西洋文化に強い憧れをもっていたことを示している。これを俄かに敵性として排撃するのは劣等感の現われに他ならないが、戦前は禁欲の美德に巧妙にすり代えられていた。

世論指導は敵愾心を煽ると同時に「敵国ノ実力ヲ下計算シ、戦争遂行ヲ容易視スルコトヲ戒メ」るものでもあった。当局はことある毎に「緒戦の勝利に酔うな」と国民に呼び掛けてきたが、その実、翼賛会、在郷軍人会といった半官半民組織を通じ国民の熱狂を喚起していた。そもそも「敵国ノ実力ヲ下計算」していたのは政府であり、だからこそ無謀な戦争を始めることが出来たのである。結局、この点は全く守られなかった。「米軍滅茶苦茶の狼狽ぶり 俺は味方だの信号も聞かず友軍機撃墜の大戦果」<sup>21)</sup>、「大統領、一時は失神状態 国務省も蜂の巣！」<sup>22)</sup>、「米市民神経衰弱 悲喜劇を繰る恐怖のドン底」<sup>23)</sup>、「敗報相次げど施す術なし 狂はん許りのルーズヴェルト」<sup>24)</sup>等々、緒戦の新聞紙面は「下計算」の見出しで賑わっていた。実際には12月8日以来、「Remember Pearl Harbor」がアメリカ人の合言葉となっていたことは周知の事実である。

そうしたアメリカの世論をよそに銃後の国民は皇軍破竹の進撃に拍手喝采を送っていた。12月10日のグアム、マキン、タワラ三島占領を皮切りに、13日九竜半島制圧、21日ダバオ陥落、23日ウェーク島占領、そして25日クリスマスの夕方香港が陥落した。号外の相次ぐ中でも香港陥落に銃後は一段と沸き立った。大英帝国アジアの拠点にまた一つ日の丸の旗が揚がり、銃後の師走は戦勝気分でも暮れていった。

しかし、年明けの正月は一層、戦時色の濃いものとなった。「門松代献金」を全区の隣組で申し合わせた東京都瀧野川区では、さらに年始年末の虚礼廃止、物資の節約、貯蓄の励行、行楽旅行の絶

対廃止を申し合わせ、「各町会を通じ区民一同に徹底させる」<sup>25)</sup>事となった。こうした動きは全国的なものであった。当局も「年末年始をねらう敵機の空襲に備へ南北関東地区に対し三十一日夜から一月四日朝まで夜間のみ警戒警報」<sup>26)</sup>を発令した。これは期間といい「夜間のみ」といい何とも奇妙な警戒警報であり、暗に戦勝気分自肅を求める当局側の意図が伺えよう。かくして、大晦日の除夜の鐘は「防空警報伝達ノ信号ニ類似スルモノト認メラル、(?!)ヲ以テ、之ガ差止」<sup>27)</sup>を決定することとなり、初詣での電車の終夜運転も中止<sup>28)</sup>、灯火管制に付き夜間外出も自肅を要請<sup>29)</sup>されることとなった。東京市では警視庁と申し合わせ次のような懸垂幕を市内の映画館、劇場に正月一杯掲げることにした<sup>30)</sup>。

「一億決死だ 真に銃後国民として、如何にもつゝましやかできりつと戦時下らしい質素な身なりをしないと命がけの兵隊さんに申し訳がありますまい」

これではおとそ気分も吹っ飛ぶといったところであるが、実際の民衆の関心も正月気分というよりは、正に戦勝気分であった。「皇軍の輝かしい開戦の戦果を見ようと、どっと押しかけた観客で映画館は長い列、々、々。某ニュース映画館は列が電車軌道にまではみ出し交通巡査が出勤して取り締まりに当たった」<sup>31)</sup>。明治神宮では終夜電車の廃止、灯火管制といった事情にもかかわらず、「午後五時二十分から奉拝が許された定刻前から戦捷の喜びと□□の決意を神前に□はうと待ちに待った市民は掃浄められた参道の玉砂利をふみしめて引きもきらず」<sup>32)</sup>、参拝に来ていた東条英機に「東条さん万歳」の声が渦のように巻き起こったという。小長谷三郎も「神宮に参拝の人の群れは皆潑刺たる国民的意識に張り切って居る」、「唯日本国民のみが持つ誇りを心の底にありし事を覚えて自分の存在が解ったように思われる。」<sup>33)</sup>とこの年の正月を記している。

1月2日閣議は宣戦の大詔が「煥発アラセラレ」た12月8日を「皇国ニ生ヲ享クルモノノ齊シク永遠ニ忘レ能ハザルノ日ナリ」<sup>34)</sup>とし、毎月八日をこれまでの興亜奉公日に代えて大詔奉戴日とすることに決定した。こうして毎月八日には宣戦の詔書奉書、必勝祈願、国旗掲揚、職域奉公が各家庭・職場・学校等で行われることとなった。八日が休日と重なった場合、「殊更ニ祭式ニ参加ヲ強制セサルコト」、「殊更ニ出勤、出校セシムルニモ及ハス」とあったが、開戦当初の国民の熱烈な自発性は官僚機構に吸い上げられ、結局この日に託つけた貯金、債券購入、勤労奉仕が実施されていく事となった。

2月15日シンガポールが陥落し18日には第一次戦捷祝賀会が盛大に挙行された。これに先立つ1月19日、既に次官会議の席上に『新嘉坡陥落ノ際ニ於ケル戦捷祝賀行事实施要領』<sup>35)</sup>が提出されており、これまた「戦勝ニ酔ツタ」当局による演出であった。当日は東条英機首相による演説が全国に放送され、ラジオを通じた万歳の一斉唱和が行われた。宮城前に遙拝に詰め掛けた民衆に、白馬「白雪」に跨った天皇が二重橋の上から拳手の礼を以て答えるという演出がなされた。これは昭和13年10月28日の武漢陥落以来のことであり、感極まった「赤子」が唱和する「君が代」は宮城を幾重にもこだました。3月に入ると、1日には満州帝国建国十周年記念式典の挙行。6日にはハワイ海戦における特攻隊隊員が九軍神として発表され、新聞は「軍神」の生い立ちから、その人となり遺族

に至る迄を事細かに報道し、遺族には全国から激励の手紙や見舞い金が殺到した。9日には蘭印軍が降伏し、10日の陸軍記念日には記念式典の挙行。そして、12日蘭印降伏を祝し第二次戦捷祝賀会が挙行され、列島全土に日の丸の花が咲き誇った。この時期、銃後の戦意は最高潮を迎え特高月報1月分、2月分の目次に「労働運動の状況」、「農村運動の状況」の項目はなく、これが最後の戦捷祝賀会になろうとは誰も予想だにできなかった。この日、小長谷三郎はこう記す。

「自分は丙種合格であり第一線に立つ能わざりしを実に残念に思う。この偉大な戦果を喜ばぬわけではないが、それが大きければ大きいだけ肩身の狭さを覚ゆ。」<sup>36)</sup>

- 注 1) 『東京日々新聞』昭和16年12月11日。  
2) 内務省警保局編『造言蜚語取締の状況(12,12)』、国立公文書館蔵  
3) 『国民新聞』昭和16年12月12日、特集「防諜総力戦(3)」。  
4) 『国民新聞』昭和16年12月24日、特集「防諜総力戦(5)」。  
5) 『国民新聞』昭和16年12月21日、特集「防諜総力戦(4)」。  
6) 『国民新聞』昭和16年12月13日、「国内食料に不安なし 長期戦断じて勝ち抜き」  
7) 『新編 埼玉県史 資料編20』、p. 487、16年12月川越警察署世論指導委員会編。同委員会は事変長期化に応じ、国民指導のため昭和15年、各警察署に設けられた時局対策研究会が改組されたものである。本要綱について中央の政策との関連は不明確であるが、後の政府の世論対策に関する文書と極めて酷似した文面になっている。  
8) 『東京大空襲・戦災誌第2巻』p. 29、「旭電化横の被弾」小黒皓太郎  
9) 同上、p. 36、「演習だ、いや実戦だ」谷内武司。  
10) 同上、p. 41、「大きな影を落として」寿賀文子。  
11) 10)に同じ。  
12) 同上、p. 33、「血の中の死」菅谷須美。  
13) 『朝日新聞』昭和16年4月19日。  
14) 『読売新聞』昭和16年4月19日、引用は見出しから。  
15) 『朝日新聞』昭和16年4月22日、同上。  
16) 『国民新聞』昭和16年4月19日、同上。  
17) 『読売新聞』昭和16年4月19日、同上。  
18) 『朝日新聞』昭和16年4月19日、同上。  
19) 『今次空襲災害ノ貴重ナル体験ニ鑑ミ将来留意スベキ事項 川越市』昭和17年8月、前掲『埼玉県史』p. 471-473。  
20) 昭和16年12月24日付『読売新聞』、「街に適性風俗横行 カメラが描く“恥ぢよ銃後!”」、『朝日新聞』、「抹殺せよ“アメリカ臭” 銀座街頭にカメラ放列」より。同運動は「考現学の大家早大今和次郎教授の指導」の下に行われた。  
21) 『東京日々新聞』昭和16年12月12日。  
22) 『読売新聞』昭和16年12月10日。  
23) 『国民新聞』昭和16年12月13日。  
24) 『読売新聞』昭和16年12月28日。  
25) 『国民新聞』昭和16年12月19日、「迎へよ緊張のお正月」。  
26) 『朝日新聞』昭和16年12月31日。  
27) 『狭山市史現代資料編』、狭山市編(1984)p. 453、「除夜ノ鐘取扱ニ関スル件 昭和十六年十二月二八日 川越警察署長 各市町村・消防団長殿」。  
28) 26)に同じ。  
29) 26)に同じ。  
30) 『東京市市政年報』昭和十七年度、p. 59、東京都公文書館蔵。



- 31) 『東京日々新聞』昭和17年1月6日。「酔漢影を潜む 頼もし自肅の正月風景」。
- 32) 『国民新聞』昭和17年1月2日、「戦勝祈る市民の群 誓ひ迎へた帝都の元旦」。
- 33) 前掲 p. 41。小長谷三郎は1月7日、明治神宮に参拝した。
- 34) 『資料日本現代史12』大月書店(1984)、p.328「大詔奉戴日設定並実施要領に関する件大政翼賛会事務総長」
- 35) 上に同じ、p. 333。
- 36) 前掲 p. 41。

## 第六節 開戦半年目 ——敗戦の予兆——

『特高月報昭和16年12月分』はその「概説」で「開戦後直近の好現象も今後予想せらるゝ戦争の長期化に伴ひ、如何なる程度に持続せらるゝや不明なり」と懸念を表明している。民心の不平不満が減ったとはいえその原因が解決されていない以上、このような懸念がでてくるのは当然である。この懸念は早くも的中し、『特高月報昭和17年3月分』の「概説」では「食料不足其他生活必需物資の入手困難、物価の昂騰等に基づく生活不安と相俟って労働者の不平不満は漸く一般に瀰漫し、作業への熱意の喪失、労働争議の不減少傾向等相当憂慮すべき実情」にあると報告されている。

労働情勢悪化の最たる原因が飯米の不足であった。主に肉体労働者、学校、多子家族、業務用米といった方面で飯米不足が深刻化した。「労働者の世帯多き」横浜大岡警察署管内においては調査総戸数の63.3%が配給米の食い込み（次の配給日迄に配給米を食べてしまうこと）を来たしており、全世帯の5.3%が配給日の3日前には米櫃が空になるという状況であった。このため、出勤率の低下や微用工の逃亡が報告されている。京都市室町国民学校においては児童の体重増加の平均が昭和13年においては2.46kgであったのに対し昭和16年は1.4kgに止どまった。このため「空腹に堪えず弁当の早喰いを為す者、或いは他人の弁当を盗食するの事件頻発」、「朝礼訓示の際又は体操の時間等に児童の昏倒する者激増」という有様であった。こうして「井戸端会議の話題はいつも米の不足ばかり」となり、いつしかそれは流言を生むに至った。それは「本能的に飯米不足は死を連想するものの如く流言等に於いて死に関するもの其の大半を占め」、買い出しの米を巡査に取り上げられ首を吊って死んだ者の話とか、一碗の飯を争って兄が弟を殺してしまったといった悲惨なものが多かった<sup>1)</sup>。不足は米に限ったものではなかった。生活必需品の殆どが配給制となっていたが制度の運用は著しく公正・平等に欠き、寧ろ自由販売が統制配給となったことは流通機構を不透明にし不正が横行する結果となった。統制配給による変化はまず店員の態度に現れる。「配給店や店員達の態度がガラリと尊大になり、<中略>あたかもお役所の観を呈し彼らが勝手に設けた時間以外」<sup>2)</sup>には販売をしない。横浜では八百屋が「毎日町内会から人手を出して、坂道では荷車を押し上げてくれ」<sup>3)</sup>と要求し問題となった。物不足は買い溜めを煽り、買い溜めが物不足を生むという悪循環に加え、販売時間の制限は行列を益々長くした。ところが、当局はこの行列を「堵列」と称し時間の空費であるとしてその取り締まりに乗り出した。こうした庶民の苦労をよそに「行列を無視して所謂『顔』の注文乃至は電話注文」<sup>4)</sup>がなされ、「特定の得意に対して前以て品物を除け置き残品を販売する傾向

が暫時顕著<sup>5)</sup>であった。「顔」、「得意」は無論公定価以上の闇値で買って<sup>6)</sup>いた。

民衆のやり場のない不満が募る中、4月18日のドゥーリトル空襲による国民の敵愾心と士気の高揚もカンフル剤的なものでしかなかった。空襲が小規模であったため、「記者達の軍部への空襲問答の笑止極まる軍部の答弁に愈々日本機で日本空襲の醜態が暴露された」<sup>7)</sup>、「東条の逆賊奴が国民を脅かしたるニセ空襲である」<sup>8)</sup>といった思わぬ「不敬不穩投書」が飛び込んできた。本土初空襲は体制への不平不満の吐け口となったのである。

4月30日、第21回総選挙が行われたが、これは棄権をする者は事前に申告が義務付けられ、投票者には「投票済証」を交付し自宅の軒先に貼らせるという「翼賛選挙」であった。しかし、当局のこうした締付けにもかかわらず、一般勤労者は「労働強化に依る疲労或は時間的余裕なきこと等を理由に其の関心は極めて低調」<sup>9)</sup>であった。

この頃になると、応召で空いた熟練労働者の穴を「白紙召集」の徴用で埋めていった結果、労働力の不足に加え質の低下が問題となってきた。小長谷三郎の日記にも4月6日、4月14日、5月18日と立て続けに死亡事故の発生が書かれている。そのうちの二件は「新米」連結手によるものであった。本職を離れた徴用工員は配置先の「職員、古参工員から『徴用！徴用！』と呼び捨てにされ<sup>10)</sup>、「新規徴用工員の最高初給賃金は客観的に低廉なる実情」<sup>11)</sup>にあった。この年、労働争議の発生件数は支那事変以来最低となったが、「争議未然防止件数の増加並びに変態的争議と目すべき逃走・転職・転労・集団暴行・合法的怠業等の頻発」、「労働情勢の険悪化が憂慮せらるる状況」<sup>12)</sup>であった。

労働者の集中する都市と対照的なのが農村情勢であり、3月17日、農村共同体建設同盟の自発的解散をして「階級的農民組織は茲に全く其の影を没し、我国農民運動史上當に画期的段階」<sup>13)</sup>に入った。この年、小作争議の発生件数は著しく減少し支那事変勃発の年の5分の1、938件に止どまった<sup>14)</sup>。特高月報の目次からは「農村情勢」の項目が4月分以降8月分に至るまで見出すことが出来なくなる。買い出しの人を相手に闇値で農作物を売り付ける農民は、食糧難の都会より遥かにましに思われた。都市住民の農村観には「土百姓共我等京洛の人間は貴様共刃逐致すぞ馬鹿御前等は死んで地獄に落ちれば本望だ」<sup>15)</sup>という激烈な形容にみられる様な反感もあった。ところがこれに対し農民も強い反感を都市の住民に抱いていた。その理由は主に農作物の低物価政策と供出の二点にあった。低物価は「小麦一俵とスフのズボン一着と交換では百姓が嫌になる」<sup>16)</sup>という感情を農民に広げた。昭和17年2月に始まった衣料切符制では一年100点の乙種が都市部に80点の甲種が郡部に割り当てられ、この差別待遇は農民の不評を買っていた。「遊んで居る都会人が沢山食べて我々が腹を減らして居てよいのか」<sup>17)</sup>とある様に、供出は「遊んで居る都会人」に米を呉てやっているようなものという認識が一般化していた。この一方、農村においても応召徴用による労力の不足が深刻化していた。この年、北海道における離農者1,874名中応召徴用による離農者は570人であり、同じく千葉県においては1,256人中実に807人を数えた<sup>18)</sup>。離農は全国的な傾向でありその殆どが都市の工場に吸収されて行くのである。この都市と農村の間での悪循環は戦争という名の近代化によりますます加速されていった。また、食料配給制の施行に伴い都市と農村の関係は「飯米」を持つ者と持たざ

る者という関係に変わり、両者の間での感情的な亀裂を決定付けるものとなっていった。

- 注 1) 司法省刑事局編『経済月報』昭和17年3月号より、「近時に於ける飯米不足の状況及之に伴ふ流言等発生状況」(1942/3)、前掲『資料日本現代史13』、p. 86—105。
- 2) 『国民新聞』昭和17年3月5日、「威張る指定店は遠慮なく投書下さい」。
- 3) 『神奈川新聞』昭和17年2月18日、「どうかと思う話 荷車の後ろ押せ」。
- 4) 『国民新聞』昭和17年2月25日、「顔の注文は“闇”だ」。
- 5) 『国民新聞』昭和17年2月25日、「未だ横行する“闇”」。
- 6) 同上。
- 7) 『特高月報』昭和17年5月分、p. 20「不敬不穩反戦反軍事件調」。
- 8) 『特高月報』昭和17年6月分、p. 20「不敬不穩反戦反軍事件調」。
- 9) 『特高月報』昭和17年4月分、p. 3「概説」。
- 10) 『社会運動の状況 昭和十七年』内務省警保局編、p. 440「国民徴用令の実施を巡る各方面の動向」。
- 11) 同上。
- 12) 同上、p. 528、「労働争議の傾向」。
- 13) 『特高月報』昭和17年3月分、p. 3「概説」。
- 14) 『社会運動の状況 昭和十七年』、p. 707—708「小作争議」。
- 15) 1)に同じ、京都で甘藷15俵が盗まれてその現場に残されていた落書きである。
- 16) 同上、p. 569「農村情勢、概説」。
- 17) 上に同じ。
- 18) 同上、p. 582「耕地返還並びに離農を巡る動向」。

## むすびにかえて

民衆統制の方針は覚悟を促すという面と「南方物資」に見られるような希望を喚起させる面とを持っていた。これは民衆心理の二面性とも合致するものである。民心には國體信仰に対する翼賛と植民地獲得に対する「欲算」、英霊に対する憧憬と前線に対する恐怖といった相反する気持ちが存在し、状況に応じそのいずれかが民衆の表情に現れるのである。「民衆の側の戦争責任」という観点からすれば、この点に民衆の主体性、一貫性のなさがあり、それゆえ戦争責任が自覚されないという結論になる。確かに民衆の戦争責任を断定するにはこのような正論も重要である。しかし、それは結果論に過ぎず、そこから民衆の実像や戦争協力に対する彼等の動機を引き出すことは出来ない。このことは都市と農村の関係を考え合わせた時、一層明瞭となろう。

農村はしばしばファシズムの温床であるかのようにいわれてきたが、封建的であるという事とファシズムの温床であるという事は区別されるべきである。体制の側が農村を堅固な支持基盤とするために農本主義を打ち出したのであり、農村の中からファシズムが出てきた訳ではない。これに対し、都市部が翼賛運動のメッカであったことに異論の余地はあるまい。農村と較べ一次集団の崩壊が著しかった都市では「臣民」という概念が人間の紐帯の復活を担っていた。農村でも翼賛運動は展開されるが熟練労働を要する「農民」の結束が堅固な一次集団としての機能を失った訳ではない。封建性がファシズムに、近代化がデモクラシーに必ずしも結び付くとは限らないのである。

仮に全体主義が近代化の挫折から生じたものであったとするならば、臣民化はその挫折への答えであった。この中で12月8日の熱狂はその「挫折」の超克に位置付けられる。戦争は単に戦闘に対する勝利だけではなく、自らの信仰（皇国イデオロギー）に対する勝利でなければならなかった。しかし、この超克は東の間の『坂の上の雲』であった。戦捷祝賀会の華々しい舞台裏で、戦争という名の近代化は民衆生活の随所にその歪を現していく。それは都市住民と農民、配給店と買い物客、庶民と『顔』、徴用工と古参工員との間に様々な感情の亀裂と利害の対立を生み出していくのである。

戦況が悪化していく中で次第に國體信仰に対する勝利だけが民衆の戦意のより何処となっている。戦争末期の惨状はもはや「決死」ではなく「必死」が、「戦死」ではなく「餓死」のみが迫っていることを示していた。しかし、開戦の熱狂の対極に来るものが何であるかを知る者は極く僅かであった。人々は、止み難い「生」への執着と捨て切れぬ國體への信仰との狭間で8月15日を迎えるのである。

この日、開戦の日の情景を想起したのか、ある作家の日記にはこう記されていた。

「私は恥ずかしかった。ものも言えないくらい恥ずかしかった。」（太宰治）